

# 源氏流華道の継承

— 付、柳沢文庫蔵 千葉龍卜筆 「生花表之巻」（翻刻） —

岩 坪 健

はじめに

一、千葉龍卜の業績

二、明源寺の住職

三、龍卜の継承者たち

四、源氏流活花の伝授方法

五、大嶋家の系譜

終わりに

十八世紀後半に千葉龍卜が始めた源氏流華道の特徴は、初めて源氏物語の内容を活け花で表現したことである。いわば華道と源氏物語のコラボレーションであり、その斬新さゆえに隆盛を極めた。しかしながら、二代めで断絶して十九世紀になると廃絶した、という通説に対して、子孫は現存し、明治時代まで栄えたことを論証する。また千葉家から分かれた流派も確認され、龍卜が後世に残した影響は多大である。

## はじめに

源氏流華道とは、十八世紀後半に江戸で千葉龍トが始めた一派であり、初めて活け花に源氏物語を取り入れたことで、世間の注目を浴びた。そのため一時は一世を風靡したが、二代めで断絶して、十九世紀になると廃絶した、というのが通説である。ところが、二十世紀まで継続していたことを示す資料が数多く見つかったので、本稿で紹介する次第である。

## 一、千葉龍トの業績

千葉龍トに関する資料は、彼および門人が刊行した版本しか知られていなかった。しかし近年に至り、成澤勝嗣氏が新資料を紹介された。まずは龍ト筆の肉筆画、二点である。それは「牡丹に猫図」三幅と「群禽図」一幅で、前者は中幅に「源氏活花宗匠松翁斎法橋千葉龍ト写意」、左右に「千葉法橋写意」、後者は「源氏活花宗匠松翁斎法橋千葉龍ト写意」と墨書されている。いずれも神戸市立博物館の図録『花と鳥たちのパラダイス―江戸時代長崎派の花鳥画―』（平成五年）に、カラー写真で掲載されている。画風については、当図録の解説（成澤勝嗣氏「出品目録・画家略伝」）によると、「牡丹に猫図」は「宋紫石の影響を強

く見せる」と指摘され、

明和四年（一七六七）に龍トが出版した『活花百瓶図』では、跋に相当する部分に宋紫石が墨竹図を寄せており、両者の交遊をうかがわせる。また龍ト自身が生け花を描いた出版物でも、その画風は紫石風である。とある。宋紫石は江戸の人で、本名は楠本幸八郎、生没年は一七一五―八六年、長崎に遊学して南蘋流を学んだ。一方、「群禽図」については、「多彩な表情を見せるインコは三谷東亭の作品と相似の姿態が多く、共通粉本を予想させる。」と記されている。

次に成澤勝嗣氏は、龍トの評判が窺える当時の文献を見された。以下、同氏「海峽をめぐる画家たち―ごく私的な郷土絵画史ノート―」（神戸市立博物館編『神戸・淡路・鳴門 近世の画家たち』七七頁、平成一〇年）から引用する。

その流行ぶりを『大田南畝全集』から拾ってみる。まず安永五年（一七七六）刊の『評判茶臼芸』。これは芸能評判記で、その活花の項には「此度千葉之介の役、かりに吉祥寺の小姓と身をやつし、座敷をかりて源氏の会、かりばの切手を出さるゝ所よし。釣船の三ぶに天窓をぶたれ、猪口の怒りをなし、二重切の太刀打見事く」と見える。また、天明四年（一七八四）

## 二、明源寺の住職

刊の黄表紙『此奴和<sup>こいつはにっぽん</sup>日本』は、日本の流行を真似したがる変な唐人を主人公とする、江戸のシノワズリに対するパロディだが、「来ル寒食の日、洞庭湖の池の端、岳陽楼にて、生け花の会あり。晴雨ともに御来駕くだされべく候と、摺り物をまはし、わが国の袁宏道流ではさへぬと、日本ではやるとき、千葉の介つねたね流とやらを興行する」として、大がかりな花会の挿絵をのせている。寺社や料亭の座敷を使ったデモンストレーションは、龍卜の得意とするところだった。また珍しい記録としては安永七年（一七七八）三月二十八日、龍野藩の儒者・股野玉川がその江戸詰日記に「龍卜ちよと過ル」と記している。また、同年五月二十七日にも「龍卜来ル」とある。同郷のよしみもあるうが、書院向きを標榜した豪奢な源氏流は、武家に需要があったものとみえる。

補足すると、股野玉川の日記は、竹下喜久男氏編『播州龍野藩儒家日記』（清文堂、平成七年）に翻刻されている。それによると三月二十八日は、「千葉龍卜子ちよと過ル、斉藤一弥取持也、即興探韻初更頃皆退散」、すなわち龍卜と探韻に興じたこともあり、文化人としての一面が窺える。なお右記の文章には「同郷のよしみ」とあるが、龍卜の故郷は龍野ではない。

千葉龍卜の出自に関しては、彼が生前に刊行した『源氏活花記』の跋文に門人が記した、「先生、姓平、族千葉、名胤綱、字龍卜、号松翁斎、播磨赤穂之人也」が、唯一の資料であった。忠臣蔵の赤穂義士で名高い「播磨赤穂」（兵庫県赤穂市）が、龍卜の故郷である。そして地元では龍卜は、浄土真宗本願寺派に属する明源寺の住職であったと言われている。当寺は赤穂市有年原（近世は赤穂郡有年村原）にあり、その過去帳、および諸文献を基にして要約すると、以下のようになる。千葉家は代々、下総の守護であったが、千葉政胤は文明年間（一四六九〜八七）に守護職を辞めて諸国行脚の旅に出て、播磨国赤穂郡に來たとき病にかかり出家する。彼が有年千葉家の元祖になる。政胤の嫡男である行胤は上洛して、珠慶坊から華道を習う。珠慶坊は千葉龍卜著『源氏活花記』によると、足利將軍義政が源氏流活花の大成を命じた「花論六人連衆」の一人である。のちに行胤は播磨で剃髪して専龍と号し、明源寺を開いた。その子、専宝が初代住職となり、現在の一九代に至る。その一九人の法名は、次の通りである。

1 専宝、2 真了、3 覺了、4 了忍、5 了順、6 了性、7 了了、8 専了、9 閑了、10 了然、11 了雅、12 了阿、

13了嚴、14了音、15了因、16了弁、17了保、18信也、  
19徹也

第一代め了雅の字が龍トで、以下、一二代めが龍子、三代めが龍式、一四代めが龍式と、源氏流活花の家元を継承した。龍トの没後、龍子が跡を継いだが振るわず、当流は途絶えたと思なされていた。しかし実際には四代にわたり、流派を維持していたのである。では、なぜ龍式と龍式が存在は世に知られなかったのか。それは龍子以後は故郷の赤穂に戻り、当地で活躍していたので、当流はいわば地域限定になってしまったからであろう。また龍子の具体的な足跡については不明な点が多いが、これも龍トが江戸で華々しく活躍したのに対して、龍子は帰郷したため知名度が他国では高くなかったからであろう。

さて、龍トの生没年は不明とされていたが、明源寺の過去帳には文化五年（一八〇八）九月五日に没したとある。ところが龍トの追悼花会を催した門人の松林斎千路が、享和元年（一八〇一）に刊行した『源氏活花図式』の序文には、「抑竜ト先生、去し秋、一露の嵐と空しく黄泉過給ひぬ」とあるので、その前年（寛政一二年）に死去したことになる、過去帳の記事と食い違う。この矛盾を成澤勝嗣氏は、次のように解釈された。

寛政一二年を偽死と考えることである。龍トは、死ん

だと称してふるさとへ帰った。江戸源氏流に自らの手で幕を引くために。他例がないわけではない。（同氏「海峡をめぐる画家たち―ごく私的な郷土絵画史ノート―」）

龍式もまた、没年が両説ある。明源寺の過去帳によると、龍子の没年は嘉永五年（一八五二）四月二三日、龍式の没年は嘉永六年五月二六日、そして龍式は文化一四年（一八一七）七月六日に生まれ、明治三四年（一九〇一）十一月一七日に没した。しかし明源寺の敷地内には、門人たちが建てた龍式の墓があり、表側には「活花源氏流家本 千葉龍式墓」、裏側には「明治廿三年三月日」と彫られていて、過去帳の年月と一致しない。けれども、明治二四年に龍式が授与した免状があり（注10参照）、また明治三〇年の龍式宛の古文書もあること（次節、参照）から考えると、没年は過去帳の方が正しいと思われる。問題の墓は墓地ではなく、本堂と庫裏の間にあるので、龍式が生存中の明治二三年に顕彰碑として門人たちが建てたものが、彼の死後、墓にされたのではなからうか。

### 三、龍トの継承者たち

龍トの跡を継いだ龍子に関する資料は乏しく、そのため源氏流は実質、龍ト一代で終ったと思なされていた。しか

しながら、龍卜没後の動静が窺える古文書類を多く収めた著書が存在する。それは高田孝三氏『源氏流活花残記』（昭和五三年、非売品）で、二二二ページにも及ぶ手書きの原稿である。一ページあたり一四行、一行は三〇余字で書かれ、文献の影印・翻刻を多数収録している。龍卜亡き後、播磨国龍野（兵庫県たつの市龍野町）に住む円尾家が徳大寺家の庇護を受け、源氏流活花宗匠として活躍した。そのため円尾家への対策が、千葉家において切実な問題となる。そのあたりの経緯について、高田氏は次のように記している。なお著作には読点が付けられていないが、読解の便宜を図り、私に句読点や「」を付す。

千葉家においても、これより高弟の間に種々の論争が起り、処するに江戸にしばしば連絡をとった模様がある。しかし時に竜卜既になく、同室何竜斎八重女、語つて云く、「当方には祖志を嗣ぐ者、既になく、東山公拝領の遺品、紅葉の賀、並に源氏流深秘、一切、古郷に送らん」と。また天保九年戊睦月、千葉宗胤より長治氏宛書状に、「紅葉の賀、秘書など父なきあと火中に投すべしと遺言されているが、苦心の作ゆえ今日まで温存している郷里のために千葉家に送る」との意あり。山野里、長治祐義、偶々、東都（江戸）に趣くを幸に紅葉の賀、其他秘書一切を持帰りて生家千葉家

に納め、この道の千葉家に永続することを願ったのである。このとき花道の後見役たる長治祐義には源氏流の花器、箒木を、高田清兵衛には桐壺を分譲している。この紅葉の賀については次の文書が名器と共に残っている。

#### 唐筌 黒頭一管

右者古代の筌也。東山殿、紅葉の賀之御器物、紛無者也。仍如件。

狛宿祢近家 花押

宝永二乙卯年 八月 日

この証明が如何なる理由で書かれたものかわからないが、狛宿祢近家は雅楽の家元にて、この真憑（マコト）を物語り、千葉氏の正統を語るものであらう。時は流れ、千葉家においては竜卜より竜子へ、更に竜式、竜式へ伝授されて明治年代に入る。

右記に引用された書状などによると、龍卜の妻は何竜斎八重女、子息は千葉宗胤である。今まで知られていなかった妻子に関する貴重な資料であるが、現在その所在は不明である。また、宝永二年（二七〇五）に狛近家が鑑定した「紅葉の賀之御器物」とは、千葉龍卜著『源氏流活花記』によると、足利義政から拝領して千葉家に伝来する花器である。その名器が実は「古代の筌」であったとは、新事実で

ある。

龍子のあと龍式、龍式と続くが、『源氏流活花残記』には龍式に関する記載はなく、龍式宛の古文書が翻刻されている。

#### 松翁齊千葉竜式

其許儀、源氏流花道家本ニ付、当御室御殿入門加列の上、別記目録之通、令許容候事。

明治三十年十一月廿七日 大本山仁和寺門跡

#### 目録

- 一、御定紋 桜<sup>ニ</sup>引 紫幕一張
- 一、御定紋 桃燈<sup>③</sup> 沓張
- 一、御定紋 絵符 沓枚
- 一、御席札 沓枚

#### 右ノ之 御室仁和寺門跡<sup>印</sup>

仁和寺は今でも御室流華道の家元であり、その門跡と千葉家が手を組んだのは、徳大寺家という公家の権威を借りた円尾家に対抗するためであろう。徳大寺家は言い伝えによると、足利義政の命を受けて源氏流活花を完成した六人連衆の一人、徳大寺義門の子孫である。そのため円尾家は、徳大寺家に近づいたのであろう。

こうして仁和寺公認のもと、千葉家は繁栄したようである。『源氏流活花残記』には、

仁和寺の許可もあり門弟次第に増し明治三十一年、門人、前田桃溪、趣意して博眞社<sup>⑤</sup>なるものを組織し強固なる家元制を再現さすのである。

と記して、六ページにわたり「源氏流花道家元規定」を引用している。その冒頭は次の通りである。私に句読点を付す。

明治三十一年七月<sup>下流カ</sup>下完、高弟ノ輩、家元ニ集合シ、花道拡張ノ決議ヲ成シ、其都度、宗匠ノ認可ヲ得テ確定シ、来ル明治三十二年八月一日ヨリ施行ス。

以下、全七条を設け、続いて「社則」を全十一条、掲載している。

次いで「源氏流花道家元規定 第二綱（口授秘伝ノ階梯）」と題して、七項（其一―其七）を立てている。其一是「入門料 金壹円 席札免許料共」、其二是「表巻五十四条 免許料 金二円」、其三是「裏巻切紙五十四条ノ内、最初、大葉十二月ノ伝ヲ授ク。免許料 金二円」と規定して、それぞれ席札の色や寸法を定めている。其三では、さらに「別伝六種」として、「紅葉、桜、松、竹、蘭、万年青。右伝授料金、六円也」と記し、「合計、裏五十四条ヲ相伝シ得ルモノ、源氏流活花皆伝ト云フ」として、免許皆伝の席札の色や寸法を示している。

次に、其四―其六の全文を列挙する。

其四、

一、源氏流定紋染込ミ幕、最モ紫地 免許料 拾円

其五、

一、奥伝十七種、真ノ活方

此ノ伝書ハ素ヨリ神秘ノ口授ナルモノニシテ、  
其士ノ深志努力ニ因リ、宗匠ノ意見ヲ以テ免許  
スルモノナレバ、金ノ定額ナシ。

其六、

一、源氏花尊六帖之由来

一、同五十四帖ノ巻、併セテ源氏六十帖之巻ト称ス。  
古来、家元一子相伝也。

其七は役員の席札の色や寸法で、以上が規定の全貌である。  
続いて『源氏流活花残記』では、役員の名前一覧を載せて  
いる。

#### 四、源氏流活花の伝授方法

前節で紹介した「源氏流花道家元規定 第二綱（口授秘  
伝ノ階梯）」によると、「表巻五十四条」を習得した後、  
「裏巻切紙五十四条」に進む、と段階を踏んでいる。これ  
は龍トが『源氏活花記』で定めたのを踏襲した、と考えら  
れる。『源氏活花記』ではまず「表之巻箇条」と題して、  
「花数葉数の事」を始めとする五十四条を列挙したあと、

右、五十四箇条、一年ほど稽古有之、四季の花出生  
遣<sup>つかい</sup>かたも相分<sup>あいわり</sup>、執心の人々には、右ケ条一卷として  
伝授せしむるなり。（ルビは一部のみ翻刻）

と記す。続いて「切紙伝授箇条」として、「大葉遣毎月の  
別」以下、五十四条を引き、

右、切紙五十四箇条は、手練深志を見届、切紙を以て  
口授せしむ。表五十四ケ条、切紙五十四ケ条、不残相  
済上、源氏五十四ケ条有り。都合、百六捨二箇条也。

（ルビは省略）

と規定している。すなわち「表五十四ケ条」「切紙五十四  
ケ条」そして「源氏五十四ケ条」と、三段階に及ぶ伝授で  
ある。その具体的な内容は不明とされていたが、手掛りに  
なる資料が奈良県郡山市にある柳沢文庫に所蔵されている。  
柳沢家といえは、五代將軍徳川家綱に仕えた柳沢吉保が有  
名である。その曾孫にあたる柳沢保光<sup>やすみつ</sup>は大和郡山の藩主で、  
千葉龍トと交流があり、後に甲州流華道を創始して家元に  
なった人である。ちなみに甲州流の名称は保光が甲斐守で  
あったことに由来し、その流派は今も続いている。

柳沢文庫には、源氏流に関わる資料が四点、伝来する。  
年号の古い順に挙げると、「花之表の巻聞書」は天明七年  
（一七八七）に、五十四ケ条の内容に関して保光が記し、  
龍トが奥書を付けた冊子本である。この五十四条は、『源



氏活花記』所収の「表之巻箇条」と一致する。ただし『源

氏活花記』では、「○花数葉数の事 ○花斗葉斗の事」の

ように項目を挙げるだけで、その内容には触れていない。

それに対して柳沢文庫本には花の活け方なども記され、巻末には本書の本文を承認する龍卜自筆の奥書が添えられている。

右、御聞書の趣、疑惑なきものなり。必、他見なき事、

肝要御事、秘中し給へし。

源氏活花宗匠 松翁齊法橋 （白文方印）（朱文

方印）

天明七丁未季 初秋日

その翌年、先の五十四か条の伝授を認めて龍卜が保光に与えたのが「生花表之巻」である。これは巻物本で、本文はすべて定家様で書かれ、格式の高さが窺える。

次いで「源氏活花切紙皆伝巻」は、寛政二年（一七九〇）に龍卜が列挙した、別の五十四か条の巻物本である。

これは『源氏活花記』所収の「切紙伝授箇条」と一致する。この具体的な内容を記したものは柳沢文庫には見当たらないが、それに該当するのが高田孝三氏著『源氏流活花残記』収録の「源氏活花書院向切紙伝」である。それは龍卜が同室の何龍斎八重女に授与すると記した奥書の付いた伝本で、絵入りの箇所は影印、それ以外は翻刻で収められて

いる。<sup>⑦</sup>

最後に「源氏活花論之巻」は、寛政八年に柳沢保光に授与されたもので、源氏物語の巻別に花器・花材などを記している。<sup>⑧</sup>それに相当するものが『源氏流活花残記』に翻刻されているが、柳沢文庫本と比較すると本文異同が多い。以下、最初の三帖を全文引用する。

○柳沢文庫本

桐壺、六条の院は桐壺の御門の御子なれば、きりつほの心は有へし。御門の御心なり。花は白を専と用ひ給ふ。白梅、白牡丹、白菊、水仙。四季に用給ふ活方、口伝。花瓶、青竹。花台、雲足。

簪木、別伝。

空蟬、秋。花は百合、とこ夏。活方、口伝。花器、硝子。花台、折敷。

○『源氏流活花残記』収録本

桐壺 きりつほ

私考、此花、物語の発端にあらねども、中の秘事と云べし。六条の院は桐壺の御門の御子なれば、桐つぼの心は有て、御門の御心なり。花形は白を雪と用ひ給ふ。いかにも、のつしりと、ゆふに生べし。花瓶、青竹。花台、雲足、白木。白梅、白牡丹、白菊、水仙。



## 空蟬 うつせみ 秋

私考、これは夜の気色、専ならん。少、盛過たる花と、苔の花と打交、用ひ給ふ。盛過たるは、西の御方にたとへ、苔の花は空蟬の君によそへしか。花形は何となく、ゆふにおとなしき風情なるべし。花器は硝子、花台は折敷也。百合、常夏、交て生る。

両者とも、帯木の巻には言及していない。これは帯木を含む六帖は『源氏活花記』で、「源氏花論六帖深秘」と定められたからである。柳沢文庫本にはこの六帖に関する文献は見当たらないが、『源氏流活花残記』には「源氏花論深秘」と題して図入りで掲載している。

右に挙げた二種類の本文を比較すると、『源氏流活花残記』の方が詳細である。このほか当書に収録された「源氏流活花書院向表巻」は、柳沢文庫蔵「花之表の巻聞書」に相当するが、やはり柳沢文庫本の方が簡略である。この相違に関しては、二通りの理由が考えられる。一つは、龍卜自筆原本が『源氏流活花残記』のと同じで、龍卜は柳沢保光には一部しか伝授しなかった。もう一つは逆に、柳沢文庫本の方が原本に近く、『源氏流活花残記』のは後に大幅に追加された、である。

以上をまとめると、龍卜が定めた三段階に及ぶ伝授は次の通りになる。伝授内容も収めているのはアルファベット

の大文字で、項目を列挙しているだけのものは小文字で示す。

A 「花之表の巻聞書」：五十四条の伝授

a 「生花表之巻」：Aの許可状

B 「源氏活花書院向切紙伝」：別の五十四条の伝授

b 「源氏活花切紙皆伝巻」：Bの許可状

C 「源氏活花論之巻」：四十八帖の伝授

C' 「源氏花論深秘」：六帖の伝授

このうち源氏物語の内容と関わるのはCとC'で、これはCの序文によると一子相伝である<sup>9)</sup>。

## 五、大嶋家の系譜

前節の最後にまとめたAとCのうちaの「生花表之巻」は、龍卜筆（柳沢文庫蔵）のほか、彼の次に家元になった龍子自筆の巻物本も存在する<sup>10)</sup>。それは天保八年（一八三七）に、龍子が大嶋宗丹に授けた「源氏活花書院向表巻」である。宗丹は地元の赤穂では今でも有名であり、諸文献を基にまとめると次のようになる。

大嶋宗丹（通称、九郎次）は、文政四年（一八二一）に赤穂で生まれた。当家は彼の祖父である万助の代から、世襲勅許鋳物師である。万助はまた、赤穂郡有年村原<sup>はら</sup>（赤穂市有年原）で寺子屋を営んでいた。当地にある明源寺の当

時の住職は千葉龍子で、先代は千葉龍卜であった。九郎次の叔父にあたる大嶋栄蔵は、千葉龍子に師事して源氏流活花を習い、文化六年（一八〇九）に源氏流の最初の免状である「書院向表巻」を授かり、松寿斎白露と号した。九郎次もまた天保八年（一八三七）に一七歳で、千葉龍子から「書院向表巻」を授けられ、その後も修業を積み免許皆伝を得て、松声斎宗丹と号した。宗丹は陶工としても有名で黄谷と号し、嘉永五年（一八五二）に雲火焼を創出して、明治三七年（一九〇四）に八四歳で没した。明治三二年に活花の門人たちの手で、敷地内（赤穂市加里屋）に石碑が建てられ、碑の表側には「大嶋宗丹先生碑」、裏側には彼の業績が刻まれている。大正九年（一九二〇）には宗丹の十七回忌が、地元で盛大に催された。

さて、『没後100年記念 企画展 大嶋黄谷』の図録に掲載されている資料のなかで、源氏物語と関わるのは「源氏流極秘奥儀抄」（便宜上、大嶋本と呼ぶ）である。それは真と行の二冊からなり、木曾こころ氏の解説によると、筆写本。源氏流は足利義政が命じて作らせた花論をもとにしているという。真の巻では源氏物語54帖のあらすじが記され、行の巻では義政の花論に千葉龍卜の解釈を加えるという形式で、各帖ごとの活け方と用いる花材が記されている。巻末に「源氏活花会頭 松聲斎

大嶋宗丹」の署名がある。

とある。九曜文庫（早稲田大学蔵）に同名の卷子本が二巻あり、中野幸一氏の解題<sup>⑫</sup>によると千葉龍卜の著書で、安政三年（一八五六）に正蔭が筆写したものである。上巻の末尾には別筆で「源氏活花会頭 松聲斎大嶋宗丹／明治廿九年五月三日／中司通明殿」、下巻末には「源氏流活華会頭 松聲斎宗丹識」とあり、九曜文庫も宗丹ゆかりの写本である。図録と中野幸一氏の解説を照合すると、大嶋本の行巻と九曜文庫の上巻は内容が同じであるらしい。

それに対して、大嶋本の真巻と九曜文庫の下巻は違うようである。両書とも正蔭の序文があるが、本文は全く異なる。また真巻は物語の要旨であるのに対して、下巻は「源氏流初伝目録」として二十六項の秘伝を挙げている。図録に収められた見開き一面には、真巻の序文の末尾と、梗概の冒頭が掲載されている。それを以下、私に句読点を付けて翻刻する。なお本文には読み仮名が多く付けられているが、翻刻するにあたり最小限に留めた。

つまびらかに物し、先此<sup>マッゴ</sup>五十四帖の巻の名を解<sup>カイ</sup>し、別に活方の秘伝抄はおくの巻としつ。そのこと<sup>コト</sup>のよしを、こゝにしるしつ。正蔭

#### 桐壺

桐壺は大内に<sup>アル</sup>有、御殿の名也。光君の御母、此殿にお

はしましけるによりて、桐壺の更衣と、なつてたてまつれり。此更衣の御腹に若宮やすくと御誕生有て、玉のやうなるをのこ御子、座給ふ。光君といふ也。ほどなく十二歳の時、御元服し給ふ。其儀式いかめしく、葵の上と御婚礼あり。御父君を桐壺の御門と申也。

いとけなき初元ゆひに長き世を契る心はむすひこめつや

この桐壺の巻の梗概文を、龍野の円尾家（注2参照）が著した「源氏五十四帖之巻」と比較すると、共通点が見られる。それは和歌のほか、次の一節である。

安々と御誕生、玉の様な御若宮にて、光君と申て、ほとなく十二才の元服も過ぎて、葵の上と御婚礼ありし

以上をまとめると、九曜文庫本「源氏流極秘奥儀抄」は大嶋宗丹ゆかりの写本ではあるが、大嶋本「源氏流極秘奥儀抄」と全巻一致するとは限らない。一方、大嶋家と円尾家では源氏物語の梗概文が似通っている。

### 終わりに

九曜文庫本「源氏流極秘奥儀抄」下巻の巻末には、「初代松翁斎千葉龍卜——二代千葉龍子——三代松寿斎白露——四代松聲斎宗丹」として、家元の系譜が記されている。

これは龍卜直系の宗匠を自負する龍式、龍式からすれば、ゆゆしき問題である。龍式が仁和寺と組んだのは（第三節参照）、円尾家のほか大嶋家にも対抗するためだったかもしれない。こうして千葉龍卜が創始した源氏流活花は、龍子が継ぎ、龍式、龍式と続くが、龍子から伝受した大嶋家は頭角をあらわし、千葉家を脅かす存在になった。この両家が龍卜没後の赤穂で活躍していた頃、同じ播磨国の龍野では、京都の徳大寺家の庇護を受けた円尾家が隆盛を極めた。徳大寺家は円尾家を源氏流宗匠として認め、他家が家元を名乗ることを禁止した。大嶋宗丹が初めて免状を与えられた天保八年（一八三七）は、円尾家が徳大寺家から家元を認可された年の翌年である。天保十年の古文書によると、徳大寺家は「千葉竜卜之末流と申立候族」の取り締まりに躍起になっていた（詳細は注2参照）。その龍卜の末流とは、赤穂の千葉家や大嶋家を指すのかもしれない。千葉家を本流とすると、大嶋家は支流、そしてこの両家と師弟関係にない円尾家は傍流と言えよう。このように十九世紀になると三つ巴の争いが起るほど、龍卜が後世に残した影響は多大であった。決して源氏流は、龍卜一代で消滅したのではないのである。

- (1) 吉栖生一氏『赤穂のやきもの』(昭和四十六年、非売品)、高田孝三氏『源氏流活花残記』(昭和五十三年、非売品)、久保良道氏『播磨国赤穂郡原村における村組織と寺院との結びつきについて―天保期以降の変遷を中心に―』(『松岡秀夫傘寿記念論文集 兵庫史の研究』所収、神戸新聞出版センター、昭和六〇年)、赤穂市立有年中学校編『郷土に学ぶ』(昭和六一年)、横山博光氏『源氏流活花本宗匠 千葉龍卜』(『ふるさと思考』28所収、平成一〇年)など。

- (2) 円尾家については文書が大量に現存するので、別稿に記す。  
(3) ただし明治三十一年に制定された「源氏流花道家元規定」の第九条には、「御室御殿ヨリ家元拝領ノ御定紋提灯」とある。  
(4) ただし徳大寺義門は、当家の系図には見当たらない。  
(5) ただし明治三十一年に制定された「源氏流花道家元規定」の第一条には、「博親社」とある。

- (6) 「生花表之巻」の全文は、本稿の巻末に翻刻した。翻刻は原文のままを原則としたが、読解の便宜を考慮して、旧漢字などは通常の字体に改めて句読点を付けた。なお「甲州御流百年史」(甲州流家元野村聴松庵編集・発行、平成二〇年)において、米田弘義氏が全文翻刻されたが、本稿では写本にあたり翻刻した。

- (7) 参考までに『源氏流活花残記』に翻刻された奥書を、全文引用する。なお□は、読解できない箇所である。

右、此切紙秘伝の図書は、自画をもて五十四条共、委しるし□なり。執心深志の門弟たりとも、一ケ条つゝ口伝して、図式は他見有へからず。生花を以て指南はひとつ、後世、我意をくわへず。予筆の丹精野写意を考へ、

一子の外、猥に他見すへからざるものなり。  
于時天明四甲辰歲、初冬十九日、浅草寺地内、梅園院において、一世一度の会筵も満尾せしにより、御流義の後世たかわざらん事をしめし、花形をゑかき、後に見る人、わたくしの沙汰、有へからざるものなり。

源氏活花宗匠 松翁齊法橋  
生花中興開基 千葉龍卜胤綱

同室 書画 龍 卜  
何龍齊八重女 授与之

この奥書の後半部と、影印の二葉分に該当する箇所は、『赤穂市史』第二卷(昭和五十八年三月)五一八ページに写真が掲載されている。

- (8) 柳沢文庫所蔵の四点のうち寛政年間の二点は、巻末の写真が神戸市立博物館の図録『花と鳥たちのパラダイス―江戸時代長崎派の花鳥画―』七七頁に掲載されている。その二点の筆跡を比べると、同一人物の手になるとは思われないほど異なる。一方は龍卜が右筆に書かせたものであろうか。

- (9) 以下、柳沢文庫蔵「源氏活花論之巻」の序文を全文翻刻する。

室町將軍源義政君、康正年中、政事のいとま、風流の御翫ひ、世にたくひなく侍る。御遊の折から、六十帖を花になぞらへて花論をたゞし、証拠を考よと、六人に命し給ひ、君にも御心を用給ひ、都て春秋を経る事、六たび、事なりければ、春秋の草を極、花をもいけならへ、春秋の趣を席上に写し、此書を選述し給ひ、御秘蔵あり。御

宝蔵に納たるを後、御相伝ありて、今一家の秘書とす。

一子相伝、外家に伝る事なし。誠に日本無双の秘書、他見他言、不可有也。右、此六十帖の花論、品定は、

紫の一もとゆへに武蔵野、草はみながら哀とそみる此歌を本拠とし給ふ。

(10) 龍子筆本の全文は、赤穂市立美術工芸館田淵記念館の図録

『没後100年記念 企画展 大嶋黄谷』(平成一六年一〇月)にカラー写真で掲載されている。それと千葉龍トが柳沢保光に与えた「生花表之巻」(巻末に全文翻刻)とを比較すると、本文は多少異なる。ちなみに明治二四年一月に龍武が記した巻物本もあり(個人蔵)、その本文は龍子筆本とほぼ同文である。

(11) 注1・10の文献のほか、『赤穂市史』第二巻(昭和五八年三月)の第3章「森氏の定着と藩政の推移」第6節「近世後期の文教と芸能」(竹下喜久男氏担当)による。

(12) 中野幸一氏「源氏流生花書解題」(『源氏物語の享受資料』四一八頁、武蔵野書院、平成九年。なお九曜文庫の写本の一部は、京都文化博物館編『読む、見る、遊ぶ 源氏物語の世界―浮世絵から源氏意匠まで―』(平成二〇年一〇月)、『いけばな―歴史を彩る日本の美―』(平成二二年一〇月)に収められている。

(13) 小稿「源氏流生花書について―東京大学総合図書館蔵「源氏五拾四帖之巻」(影印・翻刻)―」(『親和國文』37、平成一四年一二月)に、全文掲載した。

〔付記〕龍野の源氏流については、矢野環氏(同志社大学文化情報学部教授)から御教示を受けた。また千葉徹也氏(明源寺

住職)、横山博光氏(元赤穂市文化財保護連絡員)、藤本仁文氏(柳沢文庫前学芸員、京都府立大学)、平出真宣氏(柳沢文庫学芸員)、小倉嘉夫氏(大阪青山短期大学)、藤原享和氏(同志社高等学校)をはじめ、多くの方々のお世話になった。深く感謝し申上げる。なお平成二二年一〇月に、財団法人設立五〇年を記念して、『柳沢文庫収蔵品目録』が作成され、本稿に引用した資料も収録された。

〔翻刻〕柳沢文庫蔵 千葉龍ト筆「生花表之巻」(凡例は注6参照。なお本文末尾の「卜山大君」は、柳沢保光を指す)

#### 生花表之巻(外題)

凡、生花、活といへとも、草木之出生も不知しては、時をまこふ事、常に多し。生花は生方出生を第一として、花之姿、艷敷、自然に生たるやうに活なすへし。すへて花を活は、野山水辺をのつからなる姿を移し、其内に余情を付て、万花千草、其育を見かこくとくすへし。風流の余情なければ見所なし。然に格式も不守、花入不相応の花、雑木雑草、用ること有へからず。勿論、生花は祝義を第一にして、かりにも猥に不可活。生方の法を守りて其上、作意第一たるへし。法式を不知は、たとへていは、人の身のたしなみもなく、礼義も無か如し。能々、口伝を受けて可活也。中興紹鷗、利休の頃より、なけ入花とて茶の席に専用ゆ。投入といふは、花数少く手早に速に生て、とく退くを好侍る故に則なけ入たるの心、そのかたち其儘なるを以て名つくと見えたり。唯、作意のこと葉と見えたり。書院之花は、なけ入とは唱へからず。花形行義に花数多く富貴なる姿にいけなすへし。今こゝにするすは古実伝来、書院向教奇屋に到までの活方、なを其外に源氏奥入極伝

は切紙口伝にあり。先、大概をしるすのみ。

花数葉數之事。花計葉計之事。十文字見切之事。長競之事。  
色切并同色之事。花葉添不副事。菖蒲杜若之類葉遣之事。向  
枝壁枝向花之事。角口花器耳口花尊之事。卓下花器之事。香  
炉之伝。花尊水打与不折与之事。薄板露罕之事。果物類之事。  
廻花之事。客花生候節花与掛物陰陽之事。客花活仕舞候刻之  
事。客花生置帰宅之事。同賞翫之花之事。生残之花納候事。  
相客花見様作法之事。掛物二花之絵之時之事。男女赤白之事。  
客位主居之事。五節句之花之事。祝義二嫌花之事。座敷江不  
出花之事。花切時之事。室咲之花之事。萱草一八之花之事。  
神前之花之事。仏前之花之事。移徙之花之事。追善并中蔭之  
花之事。花ヲ花入之縁江為侍ル事。二重切ニ而客江花所望之  
事。一重切花器之事。出陣籠城并旅立帰国之花之事。釣花入  
之事。出舩入舩泊舩之事。鎖寸法之事。籠花器之事。細口花  
入之事。薄板敷様之事。古来花入汗之事。古来花器心持之事。  
花入釘之事。真行走之事。掛物豎横ニ寄ル事。座敷ニ依生様  
之事。庭之模様ニ依り生様之事。二重切生様之事。三重切生  
様之事。五重切生様之事。茶席花生様之事。

右五十四ヶ条。右の条々者、東山喜山相公、発明し飢ひ定め給ひ  
し源氏活花書院向活方法にして、先祖江付属し給ひしより伝統  
し是を相承し、源氏の全部書院の御式、外家に委しく知処にあ  
らず、無双の秘伝といへとも御執心の深厚により伝ふるなり。努々、  
御他言有まし。尚、此上の極伝の品々は、御手練深志を見届、切  
紙をもて追々相伝ふべきものなり。

源氏活花宗匠 松翁齊法橋（白文方印）（朱文方印）

天明八戊申歲 三月

ト山大君 授与之